

原著 (Article)

定時制高校入門

——略史と現状——

**An introduction to study on part-time course of
high school: the outline of its history and present
situation of the students**

高橋 伸行
Nobuyuki Takahashi*

摘 要

高等学校定時制課程／定時制高校（定時制）の変遷を簡単に振り返るとともに、現在の定時制の実情を紹介する。このシステムの負わされている問題を浮き彫りにするとともに、改めて定時制の存在意義を問い、中等教育のありかたにかんする問題提起を試みた。

キーワード：定時制，若年化，階層差，受け皿

Key Words : part-time course of high school, few adult students, social stratum, refuge

1. はじめに

筆者は、とある地方市の公立高等学校定時制課程（以下、定時制あるいは定時制高校）に勤務している。全日制課（以下、全日制）であっても、巷間いわれるところの、有名進学校から指導重点校（あるいはよりあからさまに指導困難校）等と称される学校まで、厳としたヒエラルキーが存在する。同一地区の高校が集まる諸会議において、高校入試の難易度＝ランキングの異なる学校同士では、校内事情が異なるため、同一テーマのもとで話が噛み合わないことも珍しくない。ランキング＝在籍生徒の所属する社会階層とみてよいからであり、社会階層が異なれば、生活背景、学校文化に差をもたらし、結果、「悩み事」の重心が完全にずれるのである。ヒエラルキーの埒外に置かれた定時制に他校で見られる問題が凝縮した形で現れ、あるいは定時制ならではの問題が発生する。一般になじみの薄い定時制の姿を伝えることで、高校教育の今後を考える一助としたい。

なお、本稿では愛知県の一般的事情を中心に記し、差し障りのない範囲で、筆者勤務校（以下 A 高校）の情報を織り込む。地方によって、また同一都道府県内でも、個々の学校により状況が異なることはご了解いただきたい。

2. 定時制高校とは

2-1. 開講形態

定時制とは「夜間その他特別の時間又は時期において授業を行う課程」（学校教育法第44条）を指す。農村部の高校にみられた時期定時制は姿を消し、現在の定時制には開講形態の異なる2種類が存在する（表1）。昼間定時制は社会情勢の変化とともに、単位制高校（1988年の学校教育法一部改正で誕生）として「全日制のように学年・クラスに縛られない」ことを求める者の人気を集めている。そのため、受験生の層が夜間定時制と異なり、生徒の状況に夜間定時制との相違がみられる。本稿では、以下夜間定時制に限定して論考をすすめる。表2には、夜間定時制の時間割の一例を示す。

表1. 高等学校の開講形態（愛知県教育委員会 web site を参考に作成）.

課 程	修 業 年 限	学習形態	入学資格・卒業により得られる資格
全日制	3 年	昼 間	全課程とも同じ
定時制	3 年以上*1	夜 間	
		昼間*2	
通信制		自宅、学校	

*1 学校教育法一部改正（1988）による。4 学年制だが、他課程・他校併修、高校卒業程度認定試験（旧大検）等の併用による短縮が可能

*2 二部制（午前、午後のように時間差のある時間割）で開講。繊維産業従事者を支えた交替制であったころの名残り。

表2. 夜間定時制の時間割例.

第1限	17：20～18：05
給食	18：05～18：25
S.T	18：25～18：30
第2限	18：30～19：15
第3限	19：20～20：05
第4限	20：10～20：55

法に定められた高等学校である以上、どの課程を卒業しても、建前上は同等の扱いを受けるはずである。しかしながら、現実には就職、進学の際に障壁が卒業生の前に立ちはだかることがあるのも事実である。

2-2. 設置形態と規模

私立校が多数存在する通信制と異なり、定時制は公立校が多数派である。したがって、この項以降、公立校についての記述である。

全日制と定時制は本来対等な課程ではあるはずだが、現実には、全日「に」併置されている形になっていることがほとんどである。普通科の場合、その地域でのいわゆる「名

門校」に併置されていることも多く、家庭環境に恵まれ学力トップの生徒たちと、その対極にある生徒たちが、昼夜ですれ違いながら施設を共有するという、皮肉な光景を目にすることとなる。教員も別組織であり、施設を間借りしている状態のため、両課程の意思疎通・連携が課題となるケースも見受けられる。

規模は小さく、多くは1学年1クラス（定員40名）ないしは2クラスの4学年編成である。後述のように、手厚い指導を必要とする生徒が多数を占めるが、教員は法と条例にのっとって配置されるため、教頭や養護教諭を含めても専任教員10名ほどの小さな所帯である。

2-3. 入学者の選抜

入学者選抜（以下、入試）は、愛知県では全日制とは別の日程（全日制の入試より後）で実施される。検査内容は面接と作文を基本とし、基礎的学力検査（全日制の5教科の試験とは全く別のもの。国語、数学のごく基本的内容）を課すこともできる。

中学校卒業生は、全日制を希望することが多いため、定員割れをおこす定時制も少なくない。入学者が少ないことには、少人数教育を施せるというメリットがあるが、意欲・適性を欠いていても入学できてしまう生徒が生ずるため、その指導に苦慮し、現場を悩ませることにもなる。

3. 定時制の歩んできた道

3-1. 定時制の誕生

定時制は、新制高校発足と同時にその産声を上げた。中学校を卒業してただちに就職するなどの理由で全日制に進めない青少年に対し、高校教育を受ける機会を与えるために設けられた制度であり、憲法26条、教育基本法第3条に示された、教育の機会均等の精神に基づくもの（文部省、1987）である。「夜学」そのものは、古くから存在していたとはいえ、戦前の中等教育諸学校の、いわゆる袋小路型を改め、全日制の課程と同等の教育を施し、同一の資格を認めたことは、大きな進歩であり、画期的なこと（同前）であった。

3-2. 変わりゆく定時制

定時制の生徒数は、全国では昭和30年度（1955年度）の54万人（全高校生数の22%）をピークに次第に減少、平成9年に10万人、以後やや持ち直し11万人ほどで推移している。

昭和40年代にはすでに「定通の曲り角」といわれるようになったとの記述（鈴木、1979）がみられる。発足10年ほどで当初の理想から現実が少しずつ離れたことの記録とみてよいであろう。昭和40年代の離脱率（いわゆる退学率）が平均30%を超え、昭和30年代のその約2倍になったこと、離脱の主な理由が経済的理由か

ら、怠学、長期欠席へと変化したこと、そして、全日制に進学できなかったか、全日制を退学し、やむなく定時制に入学してくる生徒が多数存在することがこの頃すでに嘆かれ（同前）ている。

日本が経済大国化し、高校進学率が上昇するとともに、全日制への進学指向が高まり、定時制を志望する者は減少していく。地元に高校をという熱望により農山漁村部の分校が増加したことなどもあり、昭和 29 年度に最多の 3,208 校を数えた公立定時制も、何度かの統廃合の波にさらされていく。昭和の終わりには 1,000 校を割り、平成 20 年代に入ると、700 校を下回るようになった。平成 23 年 5 月 1 日付け学校基本調査によると、愛知県立高校 149 校中、定時制を設置している高校 29 校（夜間 27 校、昼間 2 校）、在籍生徒数は全日制 11 万 5 千名、定時制 3 千 8 百名となっている（愛知県教育委員会、2011）。

4. 現在の定時制

設立趣旨からおおきくかけ離れた場となってしまった定時制は、20 数年前には授業の荒廃・崩壊、非行・暴力などへの対応に追われていた。定時制に通う生徒たちは時代とともに大きく変化してきている。現在の定時制の様子的一端を以下に紹介する。

4-1. 生徒たちの今

(1) 若年化と非正社員化

全日制に比べれば、年齢にばらつきがあり、多様な経歴の生徒が在籍する。とはいえ、現在の定時制は若年化が進み、10 代の生徒が多数を占めている。学校によっては、旧来型の、向学心に燃える高齢の生徒も在籍するが、現在では非常に少数である。A 高校でも、百十数名の在籍生徒中成人生徒は数名を数えるにすぎず、中高年の生徒はいない。

有職率は年度ごとにばらつきがあり（表 3）、また頻繁に転・離職を繰り返すため、傾向を表し難いが、生徒全体の 5 割弱～7 割弱あたりを前後する。2010 年 2 月の愛知県全体の調査でも 7 割ほどの生徒が就業し、そのほとんどがパートタイムまたはアルバイト（愛知県定時制通信制教育研究会、2012）という結果がでている。

表 3. A 高校の就業状況。

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
全学年計	64／95 (67.4)	61／111 (55.0)	74／131 (56.5)	78／120 (65.0)	74／119 (62.2)

※数値は就業生徒数／在籍数、カッコ内は％

(2) 粗暴ではないが幼さの目立つ集団

多くの学校で、一昔前「不良少年」と呼ばれていたようなタイプの生徒は減少して

いる。替わってその数を増やしているのが中学校で長期欠席（以下、長欠）の経験をもつ生徒達である。A 高校でも、入学者の半数以上が中学校時代の長欠者である（表 4）。

表 4. A 高校における長期欠席生徒の入学状況.

年 度	中学校 2・3 年生の欠席日数の合計			
	欠席日数 30～50 日	欠席日数 50～100 日	欠席日数 100 日以上	該当生徒数合計
平成 20 年度 入学生	3	8	13	24 (60)
平成 21 年度 入学生	4	8	11	23 (57.5)
平成 22 年度 入学生	5	2	15	22 (52.4)
平成 23 年度 入学生	3	1	20	24 (57.1)
平成 24 年度 入学生	5	4	20	29 (70.7)

※（ ）内は入学者数（平成 20, 21 年は 40 名, 22, 23 年は 42 名, 24 年は 41 名）に対する %

メンタルヘルス面に問題を抱えた生徒も少なくないが、定時制に入学してくる層の場合、いわゆる怠学と教育相談的な意味での不登校の区別がきわめてつけ難い。筆者が、進学校とよばれる高校に勤務時に会った不登校生と一括りに「不登校」とするには違和感が強い。紙幅の関係でここでは議論を展開できないため、両者の相違を浮かび上がらせた論者（西田, 2012）の紹介にとどめる。

A 高校でも、粗暴な生徒が減少し、比較的落ち着いた雰囲気の下、少人数で家庭的な教育環境が実現できるようになりつつある。しかしながら、社会性に乏しく、精神的に非常に未熟な生徒が少なからず存在し、幼さをむき出しにした行動をとる。これらの生徒達の成長を根気強く支援することが、教員の重要な仕事になっている。これらの行動が、生育歴・環境によるもので、粘り強くさえあれば、通常の指導で改善していくものなのか、専門的な配慮・支援が必要な発達障害が背後に潜んでいるのか、現場では戸惑いが大きい。筆者は何にでも診断名をつけていこうとする、昨今の風潮に必ずしも賛同する立場ではない。また、非専門家の軽々な判断は許されないことも理解している。その上で、発達障害が疑われる生徒が複数入学しているのではないのか、というのが現場の実感である。それゆえに、今後の十分な研修機会提供や支援の必要性を感じている。

(3) 外国籍の生徒

県内の産業構造の反映か、日系ブラジル人等日本語を母語としない生徒が、毎年何名か入学してくる。学校生活を謳歌し、学業でも良好な取り組みを見せる生徒たちも、

もちろん何人もいるが、離脱していく生徒も残念ながら存在する。言葉の壁、文化・生活習慣の違いに起因する問題を乗り越えることが課題となっている。

(4) 基礎学力の欠落

全日制を退学し、転・編入してくる生徒は、学力の面では相対的にはあるが、問題が少ない。しかし、長欠経験者は中学校の（時には小学校から）勉強を経験していないために、また、外国籍の生徒は日本語リテラシーの問題で、義務教育で習得すべき内容を身につけないまま進学してくる。また、欠席無く中学校生活を過ごした生徒の中にも勉強を極端に苦手としている者がいる。それゆえ、各教科は義務教育の学び直しから始まる。より正確には、長欠経験者にとっては学び「直し」ではなく、これが初の勉強となるのだが。小学校段階の漢字の読み書きが出来ない生徒がいるため、板書や教材プリントにルビをふるなどの対応をするが、生徒達の自尊心を傷つけないような配慮も必要である。各校とも、分割講座による授業を行ったり、補習を設定したりと様々な対策をとっている（愛知県定時制通信制教育研究会、2012）。参考のため、A高校で入学直後に、実施したオリエンテーションテストの結果の一部を資料1に示す。

資料1. () 内はそれぞれの問いの正答率。問題は趣旨のみを抽出して示してある。

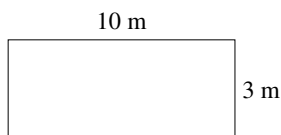
- ・日本語を示して、相当する英語の疑問詞を答えさせる

「どこ？」(19.5%) 「いつ？」(17%) 「なぜ？」(19.5%) 「だれ？」(31.7%)

- ・分数の計算

$$\frac{1}{3} - \frac{1}{5} = \quad (41.5\%)$$

- ・下の図のような土地の面積を、単位をつけて答えなさい。(41.5%)



- ・400円の飲み物は10%引きなら何円で飲めるか。(43.9%)

(5) 高い退学率

定時制は全日制（一部を除けば）に比べ、退学率が高い。半数近い（あるいは半数を超える）生徒たちが、学業半ばにして（ときには入学早々に）して学校を去って行くことも珍しくない。

受け入れた生徒が揃って卒業してってくれることは、教員としての当然の願いである。しかしながら、十分な努力を尽くした上で、それでも勉強への適性がなければ、より自分に合った道を探し直せばよい。今、機が熟していないだけならば、本当に勉

強に気持ちが向いたときに再入学でやり直しをすればよい。これが、おそらく多くの定時制のスタンスである。その意味では、義務教育ではない、高校の本来のありようを、結果的にではあるが体現しているといえるのではないだろうか。

4-2. 再生の場としての定時制

ここまで、問題点ばかりを指摘してきた。少し視点を変えてみたい。定時制進学後、中学校のときの担任が「あの生徒が」と驚くぐらいに学校を欠席しない生徒も多い。学校こそが、居場所であるという生徒も少なくないのである。中学校までの段階で学校に通えていなかった生徒たちが、何故、定時制では通うことができているのであるのか、理由をいくつか考察してみよう。

(1) 小規模であること

大規模な学校の中で、埋没していた生徒たちが、小規模の定時制でなら一成員としての感覚をもちやすい。教員は高圧的・威圧的にならないよう、受容的態度で生徒に接する（もちろん絶対の一線を引いた上ではあるが）ことを常に心掛けており、その安心感も大きな要因であろう。義務教育での研究ではあるが、教員とのかかわりの多寡が、教育効果に大きく影響するとの指摘（志水，2008）もあり、同様の効果がもたらされている可能性がある。また、多人数の集団を忌避する生徒にとっては、精神的な圧迫から解放されることが良い結果を生み出していると推察できる。

(2) 基礎基本からゆっくり学べること

何より、勉強が苦手なのは自分だけではないので、コンプレックスを感じなくてよい。また、授業は既述のように易しい内容を時間をかけて進めていく形をとっている。こんなことがわからないのか、と見放されることもない。ここでまじめに取り組むことのできた生徒は、今まで味わうことのできなかった達成感を得る。いかにささやかであっても成功体験をもつことの重要性を示唆していよう。

(3) 校則に縛られないこと

全日制では、制服が定められ（定時制でも、一部の学校においては制服が定められている）、髪型・髪の色も規制の対象であり、それらの規範を破ることは許されない。定時制においてはそのようなことで教員と衝突し、不毛なエネルギーを消費しストレスをためることがない。ただし、このように(1)、(2)のような「居心地の良さ」を提供してやることで、逆に生徒の自立を妨げ、社会に適応する力を育みきれないのではないかというジレンマをときに感ずる。

5. 定時制はどこへ向かうのか

定時制が「受け皿」扱いをされるようになって久しい。役割が変わってしまった現実には肯定的側面を見だして「治療と回復・人間復権の場」として再生させる。これこそが定時制・通信制教育の新たな使命であるとする主張が現場の一部からなされた

ことがある（愛知県高等学校教職員組合，1993）。先の見えぬ受け皿論争において、自らの存在意義を見出そうとする立場からの提言である。一方で『『定通教育は“癒しの場”である』という自己規定は、自分たちの教育力を超えた生徒達を受け入れたことにより崩壊した現場の自己欺瞞でしかない』との批判（通信制勤務時代の筆者同僚の私信）も存在する。とはいえ、4-1で述べてきたような生徒達が、行事などを通じて少しずつ成長をしていく。学び直しと同時に、小学校・中学校での通過儀礼を定時制で体験し、生き直しとでもいうべき経験を積んでいく姿をみるにつけ、定時制の存在意義の一端はここにあるものと思われる。

学力保障、生徒指導対応のための教員加配、専任カウンセラーの配置、日本語支援員の派遣時間増等現場からの要望は多い。しかし、これらは結局のところ現状を維持／改善しようという対症療法である（それすら、自治体の財政難のため実現しないのであるが）。定時制のありようを根本的に変えるには（あるいは変えるべきなのか）という問いの答えにはならない。

定時制に通う生徒達には、恵まれない、あるいは複雑な事情を抱えた家庭環境に育った者が多い。家庭環境・生活、社会経済上の要因が学業成果に影響を与えるという研究（たとえば浜野，2008；山田，2008）があるが、階層差は学力にとどまらず、包括的に生活スタイルそのものに影響が及んでいる。拡大再生産により、子も現在の生活層にとどまりがちである。ゆえに、「家庭的、経済的に恵まれず、最初から差をつけられている生徒に機会をつくるのが私たちの仕事」（生駒俊樹 都立武蔵高教諭：中日新聞，2005）となっている。

我々定時制の現場に今後求められるものとは何であろう。自治体の財政難、効率主義の世論も手伝い、定時制高校の統廃合がすすめられてきた。ところが、2009年に大阪で、2010年には東京で、定時制入試において大量の不合格者が生ずるという、イレギュラーな事態が発生した。定時制の役割が終わっているとは言い切れないことを物語るエピソードである。このような事態に関連して、定時制定員増等の運動がみられることがある。ただ、こうした運動には単純には賛同しかねる。4-1(6)で述べたように、我々は意欲のある人々に対して、いつでも門戸を開いている。学校にさえ入学してくれば、という大人の側だけの強迫観念に近い思い（それは立派な大人の仕事だという考えもあるが）だけで、意志のない子供たちもとにかく高校へ送り込むことは、必ずしも幸福の希求にはつながらないと考える。無理にでも学校に所属させる（現状がまさにそうである）ことは若者達がまっとうな道から逸脱していくことを抑止するというひとつの手段であることは理解できる。学校に入ること、目を覚ますケースがあることも認める。しかし、多くの場合、本人には苦痛と結局の脱落という、巻き込まれる周囲のものにとっては学習権の阻害という誰にとっても不毛な時間と空間を導く。いつでも、誰でも、の真の意味を生かしていくために広く定時制の姿を理解してもらふ必要性を改めて感ずる。

6. おわりに

美談としての定時制高校や夜間中学を描いた番組・特集記事にであうことは間々あっても、通常、現場の教員でさえ、定時制勤務経験がないゆえに、定時制に対する理解は乏しい。マスメディアに登場する「学力低下」問題にせよ、教育課程改訂のたびの議論にせよ、大学進学が「自然なこと」である「低くない」階層出身の研究者、有識者などの視線による「ふつうの」中高校生を念頭においたものが主流であろう（加えて、そういったことに関心をもち、視聴・購読するのも同様な層であることが推察される）。しかしながら、ひとくくりで論ずることができるような、「一般的な」高校生が存在する訳ではない（ならば「定時制は」というものの言いは自己撞着か）。国際学力調査の順位も「理科離れ」も、定時制にとってはどこか遠い世界のお話なのである。

定時制に勤務していると、用語の評価はともあれ、「格差社会」というものの言いが単なるマスメディア上の流行語ではないことを実感する。個々の問題はここで論じられるような問題ではなく、今回はそれらのごく表面をさらって羅列したに過ぎない。拙稿が定時制理解の入り口となり、議論の取っ掛かりになれば幸いである。スタンスやベクトルのいかに問わず、まずは冷静な解析と旺盛な議論を深め、諸賢の建設的な提言と現実的な援助をもって現場を支援していただくことを求めたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、校内統計の利用を快諾してくださった、筆者勤務校の同僚諸氏に深く感謝いたします。

引用文献

- 文部省（1987）定時制・通信制教育のあゆみ。「全国定通教育四十周年記念誌」、全国高等学校定時制通信制教育 40 周年記念会。
- 鈴木 渉（1979）本県定通教育の歩み。「愛知の定通教育」、愛知県高等学校定時制・通信制教育 30 周年記念会。
- 愛知県高等学校定時制・通信制教育 40 周年記念会編集委員（1989）「愛知の定通教育」。
- 愛知県定時制通信制教育研究会（2012）平成 23 年度研究集録－定時制高校の現状と基礎学力向上のための工夫。
- 全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会（2009）平成 21 年度－全国定時制通信制高等学校基本調査。
- 浜野 隆（2008）家庭での環境・生活と子どもの学力。教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書、ベネッセ教育研究開発センター。
- 山田哲也（2008）格差を縮小する「学級効果」の探求－マルチレベルモデルを用いた分析－。教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書、ベネッセ教育研究開発センター。
- 志水宏吉（2008）階層差を克服する学校効果－「効果のある学校論」からの分析－。教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書、ベネッセ教育研究開発センター。
- 中日新聞（2005）特集「60 年目の自由 第 1 部 子どもは 4」内のインタビュー、2005 年 1 月 5 日

朝刊

愛知県高等学校教職員組合定通部（1993）豊かな定通教育をめざして一定通教育改革への提言Ⅱ一。
愛知県 web site（2012）愛知県教育委員会事務局高等学校教育課－定時制・通信制教育（2012年8月22日閲覧）
西田芳正（2012）「排除する社会・排除に抗する学校」．大阪大学出版会．

■定時制・通信制高等学校を理解するための参考文献

森嶋通夫（1977）「イギリスと日本」．岩波新書，岩波書店，東京．
森嶋通夫（1978）「続イギリスと日本」．岩波新書，岩波書店，東京．
ポール・ウイリス（著）／熊沢 誠・山田 潤（訳）（1985）「ハマータウンの野郎ども－学校への反抗労働への順応」．筑摩書房，東京．
上田利男（1998）「夜学」．人間の科学新社．